公益財団法人 日本野鳥の会
Wild Bird Society of Japan

探鳥会スタッフ通信　2015年2月号

「探鳥会スタッフ通信」は、探鳥会の考え方や様々な運営手法について、全国の連携団体の探鳥会リーダーの皆様と情報交換を行うための通信です。

目 次

◆探鳥会訪問記
（羽村堰下ヨシ原保全活動）・・・・・・・・・1
◆トコロジストになろう
「守りぬかれた森の成長を見続けたい」・・3
◆徳島県支部からの情報
「吉野川河川敷のゴミ拾いとバードウォッチング」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
◆探鳥会保険集計結果
（2014年12月分）　・・・・・・・・・・6
◆普及室からのお知らせ
・新たな『フィールドガイド日本の野鳥』に向けて増補改訂新版の取り組み・・・・・・8
◆今月の購読者数・・・・・・・・・・・・10
◆探鳥会スタッフ通信の購読について・・11
◆編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・11

◆探鳥会訪問記（羽村堰下ヨシ原保全活動）

羽村堰下ヨシ原保全活動（奥多摩支部）

参加日時：2014年12月21日（日）
9時00分～12時00分　終了後に猪鍋
天候：曇り
参加者：約20名
リーダー：約5名

■当日の様子

2014年12月21日、多摩川河川敷のヨシ原管理作業に参加してきました。

多摩川中流部の羽村堰周辺は、探鳥地としても有名ですが、恥ずかしいことに、東京で生まれ育ったにも関わらず、お邪魔したことがありませんでした。管理作業の前に、どんな場所なのか、どんな野鳥たちがいるのか、確認しておかないと・・・、と思い立ち、早朝に到着しました。

気温差が激しかったのか、到着すると、一面霧に覆われていて、その中からホオジロやハクセキレイ、モズなど、たくさんの声が聞こえてきます。しばらくすると霧が薄くなり、川面にはホオジロガモやカワウが盛んに餌を採っている姿が見えてきました。河原は、一面枯草と枯れた林。その中を、たくさんの小鳥たちが忙しく飛び回っています。久しぶりに、たくさんの野鳥たちとの出会いを楽しませていただきました。

散歩やジョギングを楽しむ人たちの姿が見え始めると、双眼鏡をぶらさげた方を発見。奥多摩支部の方々も、徐々に集まってきました。さて、20 数名が集合場所に集まると、作業の手順と注意事項の説明があり、いざ環境管理作業のスタートです。

▲管理作業の様子

カナムグラやアレチウリを取り、身近なとこ

ろに何ヶ所かにまとめ、さらに大きな塊を担いでーか所に集めるという作業の繰り返しです。真冬の作業にも関わらず、数十分動いただけで、汗ばんできます。作業していると、クイナの声やモズの高鳴き、餌取りの邪魔をするなというようなアオジの地鳴きが聞こえてきます。足元にはタヌキのため糞や、カヤネズミの古巣も転がっていました。

数時間作業を続けると、
「鍋ができたぞー！」
という市川支部長の大きな声が飛んできます。作業をしている方は、もう少し作業をやりたい気持ちと、やり残した場所に後ろ髪を引かれながらも、猪鍋の魅力と魔力に誘われていくのでした・・・。

▲終了後、皆で猪鍋をいただく

■10 年以上続く保全活動

この活動は、オオヨシキリの生息地であるヨシ原が、カナムグラ、クズ、外来種のアレチウリ等が繁茂することにより、痛んでしまうのを防ぐため、2003 年 9 月からスタートしました。

面積は、50 メートル×300 メートルの 1.5 ヘクタール。国交省と交渉し、河川敷の一時使用許可を得て、毎年更新することにより、現在まで続いているとのことです。環境は、ヨシ原が中心です。ここには、湧水もあり、ゲンジボタルやイシガメも生息しているとのこと。カワラノギク、ヒロハノカワラサイコ、センダングサ（在来種）等、貴重な植物も生息しています。私は鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリや野鳥保護区で、タンチョウやシマフクロウの生息地の管理作業を行ってきました。ある意味、オオヨシキリは、タンチョウと同じようなアンブレラスピーシーズなのかも知れません。タンチョウを守るためには、繁殖地となるヨシ原を守らなければいけません。そして、ヨシ原を守ることは、そこに生息するたくさんの生物たちを守ることにもなるわけです。今回、真冬に一日訪れただけでも、小鳥の密度が高く、クイナの声が聞こえてきたり、モズが複数羽いたりと、ヨシ原を守ることで、多様性が維持されていることが良く分かりました。

■活動を支えるモチベーション

気になったのは、管理作業の大変さです。

1.5 ヘクタールの管理を、年間 19 回（ほぼ月 2 回）、11 年間続けることが、いかに大変だったことか・・・。

一方で、なんとなく想像できたのは、活動を継続することの大変さを超えるメリットや、モチベーションを維持する何かがあることです。このへんのことを熱い猪鍋を食べながら、率直に聞いてみると、
「ただ単にバードウォッチングをする趣味の会ではなく、調査や保全活動をすることで、奥多摩支部の活動に厚みができます。そして、生きもののつながりが感じられる場所、人と自然とのふれあいの場を創造する機会は、大変さよりもやりがいが勝るのだと思います。」
という答えをいただきました。

■老若男女が集う場

このような管理作業の場は、会員が集える場にもなっていました。上は 70 代、下は子供たちまで、まさに老若男女が管理作業に参加し、汗を流し、笑いながら熱い鍋を囲む。野鳥たちの姿や鳴き声を楽しむだけでなく、彼らの生息地を守る活動にも参加できる。本当に素晴らしいことだと思います。なんとなく感じていた奥多摩支部のパワーやモチベーションの高さ、ポジティブさは、こんな活動が支えているのかもしれません。

釧路や根室の現場を離れ、フィールドで身体を動かすことがなくなった私にとって、久しぶりの管理作業でした。程よい疲れを楽しませていただきました。そして美味しい猪鍋もいただきました。奥多摩支部の皆さん、ありがとうございました。また参加させてください。

このほかにも、環境管理を行っている支部があれば、参加させていただきたいと思います。ぜひとも声をかけてください。

（普及室／富岡辰先）

◆トコロジストになろう

今月は、北海道ブロックの苫小牧支部会員、島崎康広さんに、ご自分のフィールドの青葉公園について書いていただきました。

第10回「守りぬかれた森の成長を見続けたい」

■私のフィールド「青葉公園」

私が今の千歳市に引っ越してきたのは、1992年12月のことでした。引っ越して早々、新しい土地でのバードウォッチングのフィールドを探していたところ、市街地に面して青葉公園があることを知りました。それ以来、そこが私のフィールドです。

園内には陸上競技場、野球場、サッカー場があり、広い散策路はクロスカントリースキーやジョギング、ウォーキングで市民に親しまれています。自然は、樹齢 300 年以上のミズナラをはじめ、80 種の木本、280 種の草本、94 種の野鳥が確認されており、2000 年には千歳市の条例により第２種自然環境保全地区に指定されました。

市街地の隣に豊富な自然が残された理由には、この土地の歴史があります。青葉公園は、支笏（しこつ）湖周辺の山々から伸びた舌が市街地に迫り出したような地形をしています。古代の支笏火山の噴火によってできた台地が南側と北側にある２つの川の浸食を受けて形成されました。そのため森林は西方にある支笏湖や樽前山まで続き、戦前は御料地として、戦後は国有林として自然が守られてきました。

■青葉公園のトコロジストになる

この公園で漫然とバードウォッチングを楽しんでいたのですが、図書館で一つの小冊子に出会いました。それは地元の高校の校長先生がまとめた「千歳の鳥」です。

その本と出会い、自分もならって市内と青葉公園内の野鳥を季節ごとにまとめようと、出勤前の早朝に青葉公園を歩くようになりました。しかし対象は野鳥のみでした。

その後、2003 年～2006 年にかけて「千歳の自然保護協会」が公園内の植物を調査し「青葉公園の植物」を発行しました。それを機に、野鳥以外も学んでみようと思いました。それと前後して「トコロジスト」という言葉に出会い、興味を持ちました。

現在はブログによって情報を発信し、他のブログを探して青葉公園について書かれていたら積極的に声をかけることにしています。

▲青葉公園

■20 年の観察から思うこと

私がしていることは個人の道楽の範囲ですので、気温がマイナス 20 度にまで下がる厳冬期には記録が更新されなかったり、識別能力の低さから資料としては心もとなかったりします。

しかし、20 年余り通っていると見えてくることもあります。例えば、私が歩き始めた頃は、春から夏にかけての繁殖期には、駐車場に着いたとたんにクロツグミやキビタキ、アカハラ等のさえずりが賑やかに聞こえていましたが、あるときから野鳥の声が少なくなっています。

それは 2004 年９月、北海道に大きな被害をもたらした台風 18 号の強風により、支笏湖周辺の約 74ha の国有林の樹木のほとんどが倒れてしまったときを境にしています。青葉公園と支笏湖を結ぶ森林が無くなってしまいましたが、そのために野鳥が少なくなったのではないかと考えています。もっと時間をかけて調べれば、何が起きたのかがわかったのかもしれません。

青葉公園の隣には千歳川が流れ、上流ではヤマセミを楽しみにするバードウォッチャーが多く訪れます。川の途中で工事が始まると青葉公園の近くでもヤマセミが頻繁に見られました。　　地球温暖化の影響か、北海道では越冬しないと言われていた野鳥が厳冬期でも見られる回数が増えてきました。

また最近は、公園内を散歩するエゾシカの群

れが頻繁に見られ、オオウバユリの群生がつぼみのうちにすべて食べられています。
　今後、自然がどう変化するのかわかりませんが、青葉公園は支笏湖につながる手つかずの自然の様子を知るのぞき窓なのかもしれません。

■将来の夢

　（公財）北海道健康づくり財団と北海道庁保健福祉部が認定したウォーキングコースに青葉公園も認定されていますが、コースには「おはよう散歩道～市民が守りぬいた森～青葉公園コース」と書かれています。
　「市民が守りぬいた森」であり、多くの市民に親しまれている森を守るため、変化があった場合はどう関わっていけばいいのか、将来は小さくても青葉公園を守るグループができれば・・・と夢見ています。

（苫小牧支部／島崎康広）

◆徳島県支部からの情報

　徳島県支部の三宅武支部長から、大学生や親子など計 260 名が参加した「吉野川河川敷のゴミ拾いとバードウォッチング」について、情報をいただきました。

「吉野川河川敷のゴミ拾いとバードウォッチング」（徳島県支部）

■開催の経緯

　トヨタ自動車と徳島新聞、日本野鳥の会徳島県支部の共催で、「清掃とバードウォッチングで自然と野鳥を身近に感じ、環境保全意識を向上させる」ことを目的として、「吉野川河川敷のゴミ拾いとバードウォッチング」（AQUA SOCIAL FES!! ※ 2014 IN TOKUSHIMA）を開催しました。トヨタ自動車はハイブリット車「アクア」の宣伝になり、徳島新聞は自社の PR と「アクア」の宣伝による収入が得られ、徳島県支部は会の PR と会員増につながるため、三者の利が合致し、開催の運びとなりました。
　※「AQUA SOCIAL FES!!」は、2013 年からトヨタ自動車が「アクア」の発売にあたり全国で展開している、一般参加型の社会貢献プロモーションです。

▲野鳥観察の様子

■当日の様子

　2014 年６月７日（土）と７月 12 日（土）に、吉野川橋南詰河川敷広場で開催しました。広報は、徳島県で約８割のシェアを持つ徳島新聞への掲載と西日本の各道の駅への配布で、両日とも 130 名の参加がありました。
　当日は、130 名を 2 班に分け、ゴミ拾いと野鳥観察を 10 時～12 時の間に 1 時間ずつ交互に実施しました。徳島県支部では、野鳥観察の講師を受け持ち、約 15 名の会員が協力しました。
　まずは、望遠鏡 1 台に対して約 12 名の参加者を対応するかたちで、30 分間野鳥観察をしました。講師の皆さんは、それぞれに熱意のこもった解説をしていました。
「あの棹の先にとまっている鳥がミサゴです。このミサゴの英語での名前がオスプレイです。空中でとまった飛び方、ホバリングといいますが、その飛び方から飛行機の名前になりました。」
「あ、いまのツバメですね。渡り鳥の代表と言っていいですね。家の近くで巣をみませんか？」
参加者からは、望遠鏡で大きく野鳥が見えると、
「わぁ、きれい。鳥ってこんなにきれいなんだ。」
「何もいないみたいでも、教えてもらうと、随分、鳥っているんですね。」
などの声が聞かれ、広い河口の自然を改めて認識されたようでした。

残りの時間は、「鳥とエサ」をテーマに作成した、野鳥写真のパネル展示を見ていただきました。パネル展示では、剣山（つるぎさん）から吉野川、海までの各環境で、エサを食べている野鳥が見られるようになっており、こちらも大好評でした。

▲「鳥とエサ」のパネル展示

参加者への資料として、徳島県支部からは、財団作成の①入会申込書と②ミニミニ野鳥図鑑、支部作成の③吉野川河口干潟のパンフレットと④野鳥観察会のご案内（県内５か所年間実施日）を参加者に渡し、会の PR としました。ただし、さらに進んでお試し入会などの連絡は出来ていませんでした。なお、イベントは事前申し込み制で、参加者は徳島新聞へ、氏名、年齢、住所、電話番号などを記入して申し込みをしました。

■開催を終えて

各回の参加者の内訳は、徳島大学工学部、四国大学、徳島文理大学などの大学ボランティアグループが約 100 名、一般の親子、会社関係の若い方が約 30 名でした。これほど多くの若者に野鳥観察会を実施したのは、支部設立以来、初めてのことで、貴重な機会となりました。

（まとめ：普及室／堀本理華）

普及室では、企業とタイアップしたイベントや、大型探鳥会の事例を集めています。情報をお持ちの方は、tancho-staff@wbsj.org までお寄せください。

◆探鳥会保険集計結果（2014 年 12 月分）

12 月は 65 支部からご報告をいただき、計 257 回の探鳥会が開催され、のべ 5,747 人が参加されました。

表 1.12 月の探鳥会保険集計結果（2015 年 1 月 15 日現在）

支部	開催回数（回）	参加者数		スタッフ数（人）	合計人数（人）
		会員（人）	非会員（人）		
小清水	−	−	−	−	−
オホーツク支部	1	19	11	1	31
根室支部	−	−	−	−	−
釧路支部	0	0	0	0	0
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	−	−	−	−	−
旭川支部	0	0	0	0	0
滝川支部	−	−	−	−	−
道北支部	0	0	0	0	0
江別支部	−	−	−	−	−
札幌支部	3	57	25	6	88
小樽支部	1	2	1	1	4
苫小牧支部	−	−	−	−	−
室蘭支部	1	17	7	3	27
函館支部	−	−	−	−	−
道南桧山	1	13	13	5	31
青森県支部	−	−	−	−	−
弘前支部	2	12	3	2	17
秋田県支部	3	20	3	3	26
山形県支部	2	5	6	3	14
宮古支部	−	−	−	−	−
もりおか	1	21	4	5	30
北上支部	0	0	0	0	0
宮城県支部	4	50	15	8	73
ふくしま	2	41	0	4	45
郡山支部	1	15	0	3	18
二本松	2	5	0	3	8
白河支部	1	1	0	2	3
会津支部	−	−	−	−	−
奥会津連合	−	−	−	−	−
いわき支部	1	16	1	1	18
福島県相双支部	−	−	−	−	−
南相馬	−	−	−	−	−
茨城県	14	147	71	22	240
栃木	−	−	−	−	−
群馬	6	59	43	25	127
吾妻	0	0	0	0	0
埼玉	10	263	89	77	429
千葉県	13	154	55	67	276
東京	15	521	7	67	595
奥多摩支部	15	245	121	67	433
神奈川支部	11	205	56	38	299
新潟県	−	−	−	−	−
佐渡支部	−	−	−	−	−

富山	2	28	4	2	34
石川	2	16	2	4	22
福井県	1	5	10	4	19
長野支部	0	0	0	0	0
軽井沢支部	1	7	4	1	12
諏訪	1	4	0	2	6
木曽支部	−	−	−	−	−
伊那谷支部	−	−	−	−	−
甲府支部	1	19	1	2	22
富士山麓支部	1	8	1	2	11
東富士	−	−	−	−	−
沼津支部	1	10	3	1	14
南富士支部	2	32	15	11	58
南伊豆	1	18	1	2	21
静岡支部	3	24	0	5	29
遠江	3	66	9	8	83
愛知県支部	15	165	108	39	312
岐阜	−	−	−	−	−
三重	4	45	25	7	77
奈良支部	2	54	1	4	59
和歌山県支部	1	6	2	2	10
滋賀	5	44	37	9	90
京都支部	5	58	43	11	112
大阪支部	25	395	79	107	581
ひょうご	12	102	90	32	224
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	3	32	3	3	38
島根県支部	2	16	0	2	18
岡山県支部	4	78	39	15	132
広島県支部	5	35	33	5	73
山口県支部	4	14	4	4	22
香川県支部	3	79	10	3	92
徳島県支部	5	52	9	5	66
高知支部	−	−	−	−	−
愛媛	4	46	30	8	84
北九州	3	48	0	3	51
福岡支部	7	127	22	16	165
筑豊	2	17	0	2	19
筑後支部	4	22	5	4	31
佐賀県支部	3	43	6	3	52
長崎県支部	−	−	−	−	−
熊本県支部	3	93	21	4	118
大分県支部	1	18	6	1	25
宮崎県支部	3	28	17	4	49
鹿児島	3	49	25	10	84
やんばる支部	−	−	−	−	−
石垣島支部	−	−	−	−	−
西表支部	−	−	−	−	−
全国	257	3,791	1,196	760	5,747

備考：-は保険の申請がなかったことを示しています。

（普及室）

◆普及室からのお知らせ

■新たな『フィールドガイド日本の野鳥』に向けて増補改訂新版の取り組み■

◇順番の意味は？掲載の基準は？

「増補改訂新版ではこれまでの解説の順番を敢えて変えない」と、以前に書きました。目録７版の掲載順に解説する図鑑や改訂版も発行されるようになりましたが、「使いにくくなった」とか「海外の図鑑と揃ってよい」など賛否はさまざまあるようです。新版では、目録の掲載順の意味はおさえておきたいと考え、「目録の掲載順は、進化の道筋や類縁関係を反映させようとしている」と記す予定です。

「反映している」ではなく「反映させようとしている」とした理由はおわかりいただけるでしょうか？　例えばハト目はどこに位置するかなど、まだ研究は続いているわけです。「すべてわかっている、決まっている」ような書き方によって、固定的に捉えてしまう人を増やさないようにしたいと考えた次第です。

目録７版で 91 種も掲載種が増えた理由のひとつに、目録６版での「観察個体の種が同定できても亜種が判定できない場合には掲載しない」という方針の変更があり、・・・現在の鳥類学の到達点を明確にし、不十分な点について今後の検討を促す目的でこのような種も掲載することにした・・・と記されています。

『フィールドガイド日本の野鳥』では、増補版から登場するヒメモリバトがよい例です。「1984 年 11 月に山形県飛島で記録された」と書かれていましたが、目録６版では検討中とされたため、増補改訂版で「記録され」を「観察され」に直しました。目録７版では亜種不明のまま飛島以後も含めて記録として掲載されたので、新版で晴れて「記録された」と書き直しました。

◇要検討の亜種？

新版は解説順は変えないものの、目録７版の掲載順で日本鳥類リストを付けました。それを見ていただくと、目録７版と新版の画期的な点に気づかれるでしょう。

目録７版では、「検討を要する」と記された亜種が少なくありません。『フィールドガイド日本の野鳥』増補版での「野鳥チェックリスト」は種の単位にして、亜種は記しませんでした。増補改訂版では「野鳥チェックリストとレッドリスト」としてレッドリストで掲載された亜種は記すようにしました。新版では目録７版に準拠した鳥類リストに亜種も、外来種・亜種や検討中の種・亜種も、和名はすべて記すようにしました。検討を要するとされた亜種は？マークをつけたので、最も亜種が多いコゲラの例を紹介しておきます（科の後に種名、その後一マスあけて亜種名を並べました）。

キツツキ科
　コゲラ

エゾコゲラ	北
コゲラ	?本（北・中）・佐
ミヤケコゲラ	?南（大隅）・伊
シコクコゲラ	?本（西）・四
ツシマコゲラ	隠・対
キュウシュウコゲラ	九
アマミコゲラ	南（奄）
リュウキュウコゲラ	南（沖）
オリイコゲラ	南（先）
亜種不明	

亜種名の右には分布域を簡略化して示してあり 北＝北海道、本＝本州、四＝四国、九＝九州、佐＝佐渡、伊＝伊豆諸島、硫＝硫黄列島、小＝小笠原群島、隠＝隠岐、対＝対馬、南＝南西諸島 です。また（北）（中）（南）（西）はそれぞれの地域の北部、中部、南部、西部を意味し、さらに南西諸島では（大隅）＝大隅諸島、（ト）＝トカラ列島、（奄）＝奄美諸島、（沖）＝沖縄諸島、（先）＝先島諸島、（大東）＝大東諸島 としました（これらで示せず具体的な地名を記したところもあります）。

つまり、？がついた亜種コゲラは、目録７版に本州北・中部、佐渡で記録されているものの、「本亜種の分布域は明確でないため、検討が必要である」と記されているわけです（亜種ミヤケコゲラ、亜種シコクコゲラも分布域要検討と記されている）。亜種不明のコゲラは新版では詳細を記せませんでしたが、目録では舳倉島（AV）、種子島（RB）とされています。（AV は accidental visitor でごく稀を意味し、RB は resident breeder 恒常的に繁殖していることを意味します）

余談ですが、コゲラは要検討と不明亜種を除くと6亜種になってしまうので、8亜種が記されているヒヨドリやヤマガラも亜種が多い種としては忘れてはならないでしょう。ヤマガラでは亜種ダイトウヤマガラが絶滅とされているので、ヒヨドリの例を示しておきます（亜種ヒヨドリのように広く分布する亜種については亜種名のみとしてあります）

ヒヨドリ科
　ヒヨドリ
　　ヒヨドリ
　　オガサワラヒヨドリ　　小
　　ハシブトヒヨドリ　　硫
　　ダイトウヒヨドリ　　南（大東）
　　アマミヒヨドリ　　南（ト～奄）
　　リュウキュウヒヨドリ　南（沖・宮古諸島）
　　イシガキヒヨドリ　　南（先）
　　タイワンヒヨドリ　　南（与那国島）

◇絶滅した亜種？

ハクセキレイやツメナガセキレイも多くの亜種が記録されていますが、これらは野外識別が可能と思われるので本文で解説や図示に努めています。ここでは目録6版から変わった例としてウグイスの7亜種中の2亜種の例を示しておきましょう。

ウグイス科
　ウグイス
　　ダイトウウグイス　　南（奄・沖）
　　リュウキュウウグイス　？南

目録6版では、亜種ダイトウウグイスは絶滅、亜種リュウキュウウグイスは奄美諸島・琉球諸島・大東諸島などで RB とされていました。7版では亜種ダイトウウグイスは奄美諸島（RB)、沖縄諸島（RB)、大東諸島（FB：南大東島）とされ（FB は former breeder 過去に繁殖していた)、亜種リュウキュウウグイスは分布域の再検討が必要であるとされたので、新版のリストでは上記のように記すことにしました。「亜種ダイトウウグイスの再発見」などと新聞でも取り上げられましたが、メグロの亜種名が変わったことも話題にしてよいのではないでしょうか？　環境省のレッドリストとのずれが生じているため、新版の鳥類リスト作成時に悩まされました。

メジロ科
　メグロ
　　メグロ××　　聟島・媒島・父島
　　ハハジマメグロＪ　　母島列島など

××は絶滅、Ｊは環境省の指定での絶滅危惧レベルを示しますが、環境省のレッドリスト（第4次）では絶滅したのは目録6版に沿って亜種ムコジマメグロとなっています。学名を調べれば、亜種ムコジマメグロと呼んでいたものを7版では亜種メグロとしたことはわかるのですが、誤解、混乱の可能性があるので、新版では但し書きを記しておきます。

（普及室／安西英明）

▲目録７版における新たな掲載種の図版を、担当された谷口高司さんの了解を得て紹介していますが、今回はマミジロノビタキです。図版スペースが１点分しかないので、日本で見る機会がありそうで、識別が難しい若鳥を描いてもらいました。なお、類似種との識別で重要になる腰が見えるように、翼を下げた姿勢になっています。

◆今月の購読者数

探鳥会スタッフ通信２月号の電子メール版の購読者数は、先月から９名増えて８４５名です。支部ごとの購読者数は以下の通りです。

表２．探鳥会スタッフ通信２月号電子メール版の購読者数（2015 年２月１２日現在）

支部	購読者数	支部	購読者数
小清水	1	福井県	10
オホーツク支部	6	長野支部	2
根室支部	0	軽井沢支部	2
釧路支部	2	諏訪	4
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	70	木曽支部	1
旭川支部	4	伊那谷支部	1
滝川支部	1	甲府支部	1
道北支部	1	富士山麓支部	0
江別支部	0	東富士	0
札幌支部	1	沼津支部	3
小樽支部	3	南富士支部	2
苫小牧支部	2	南伊豆	2
室蘭支部	4	静岡支部	3
函館支部	0	遠江	6
道南桧山	2	愛知県支部	33
青森県支部	1	岐阜	5
弘前支部	4	三重	19
秋田県支部	3	奈良支部	1
山形県支部	3	和歌山県支部	2
宮古支部	1	滋賀	19
もりおか	3	京都支部	132
北上支部	2	大阪支部	21
宮城県支部	39	ひょうご	9
ふくしま	2	NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	11
郡山支部	1	島根県支部	2
二本松	1	岡山県支部	23
白河支部	2	広島県支部	7
会津支部	2	山口県支部	4
奥会津連合	0	香川県支部	3
いわき支部	1	徳島県支部	5
福島県相双支部	0	高知支部	1
南相馬	0	愛媛	14
茨城県	21	北九州	12
栃木	45	福岡支部	12
群馬	24	筑豊	20
吾妻	1	筑後支部	6
埼玉	36	佐賀県支部	4
千葉県	18	長崎県支部	1
東京	49	熊本県支部	5
奥多摩支部	47	大分県支部	2
神奈川支部	15	宮崎県支部	3
新潟県	1	鹿児島	1
佐渡支部	1	やんばる支部	0
富山	3	石垣島支部	1
石川	5	西表支部	2
		合計	845

（普及室）

◆探鳥会スタッフ通信（電子メール版）の購読について

探鳥会スタッフ通信は、支部の探鳥会スタッフならどなたでも購読できます。（無料です）

ご希望の方は、「探鳥会スタッフ通信希望」と明記のうえ、①支部名 ②担当している探鳥会名 ③お名前 ④ご住所 ⑤電話番号 ⑥メールアドレス（パソコンやスマートフォンのアドレス）を記入し、tancho-staff@wbsj.org へお申し込みください。バックナンバーとともにメール版を送信いたします。

配信を希望されない、メールアドレスの変更などについても、tancho-staff@wbsj.org までお知らせください。

★編集後記

２月７、８日に探鳥会リーダーズフォーラムを開催しました。支部の探鳥会リーダーと財団職員計 44 名が交流し、探鳥会について大いに話し合う機会となりました。

梅の花が咲き、春の気配を感じる季節となりましたが、まだまだ寒い日が続きます。お体に気をつけてお過ごしください。

（普及室／堀本理華）

日本野鳥の会
探鳥会スタッフ通信　第23号
◆発行
（公財）日本野鳥の会　2015年2月24日
◆担当
普及室　普及教育グループ
〒141-0031
東京都品川区西五反田3-9-23丸和ビル
TEL：03-5436-2622
FAX：03-5436-2635
E-mail：tancho-staff@wbsj.org